

千葉県袖ヶ浦市吉野田の下総層群清川層から産出したシカ類化石

Fossil cervid from the Kiyokawa Formation (Middle Pleistocene) in Sodegaura city, Chiba Prefecture

高桑 祐司[1]

Yuji Takakuwa[1]

[1] 群馬自然史博

[1] Gunma Mus. Nat. Hist.

シカ類化石は袖ヶ浦市吉野田に分布する清川層から産出した脊椎動物化石のうち、カメ類とともに産出頻度が高い。それらには部位の重複があり、複数個体が含まれることは明らかである。骨格要素はいずれも遊離しており、同一個体に帰属する標本が確認されているカメ類化石の産状とは大きく異なる。しかし稀な産状であるが、それぞれ別々のグリッドから発見され、剖出作業の過程で接合が確認された標本もある。

今までに確認したシカ類化石の産出部位は、以下のとおりである。

「頭 部」：角の一部、上顎臼歯、下顎骨、下顎臼歯

「体幹骨」：頸椎、腰椎、仙椎

「前 肢」：上腕骨、とう - 尺骨、中手骨、手根骨

「後 肢」：寛骨、脛骨、中足骨

「四肢骨」：基節骨、中節骨

化石・現生を含めシカ類の分類基準は角の形態である。特に日本の更新統産シカ類では角座から第一分岐まで保存されていれば、ある程度の同定が可能である。吉野田産シカ類化石ではこの部分が未発見であるため、この方法を用いた同定は困難であった。しかし、ニホンムカシジカ亜属と現生のニホンジカ亜属では四肢骨の形態に違いがあることが指摘されており(市原化石ジカ研究グループ, 1994)、ニホンジカ亜属の方が全体的に細いプローションを持つ。吉野田産シカ類化石の中手骨と中足骨の形態をほぼ同時代に生息したニホンムカシジカ亜属(ニホンムカシジカ)と比較すると、吉野田産シカ類化石のそれは明らかに細く、ニホンジカ亜属の持つ形態に類似する。このことから、吉野田産のシカ類化石はニホンジカ亜属の未定種に同定される種類が含まれる。

ニホンジカ亜属には現生のニホンジカや化石種のグレイ氏斑ジカやその亜種のカトウキヨマサジカが含まれるが、日本列島からの本亜属の化石記録は極めて断片的である。よって吉野田産シカ類化石は、今後ニホンジカ亜属の進化プロセスやそれに伴う放散パターン等を議論する上での重要な化石記録の一つだと言える。